
時空連合艦隊『長門』 暁の海へ

キプロス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

時空連合艦隊『長門』 暁の海へ

【Nコード】

N1124Z

【作者名】

キプロス

【あらすじ】

2022年、護衛艦『ながと』を中核とする派遣艦隊はリムパツク演習の為、一路をハワイを目指していた。その道中、艦隊は謎の台風と遭遇。突然の通信障害、レーダー不全、衛星との接続遮断と不可解な現象を襲われる派遣艦隊が台風の暴風域を出たその先は

1944年の太平洋だった。注：本作品は作者が半ば自己満足と日頃のストレス解消のために書いたものです。大抵自衛隊が大活躍して、時々『ジパング』のパロディやらなんやらが飛び交います。

【時空戦艦『大和』】で主役の『大和』がなかなか活躍せず、悶々

としている方はぜひ『長門』が大活躍する本作品をご覧ください。

第1話 黎明の遡上（前書き）

今作品は【時空】シリーズの最新作です。半ば自己満足とストレス発散の為に書いた作品ですので、ご都合主義の設定と展開が目立つと思いますが、そこはご了承頂ければ幸いです。

また、【時空戦艦『大和』】の更新を怠らせず、こちらの作品も途中で滞らせないよう頑張りたいと思いますので、よろしくお願い致します。

第1話 黎明の遡上

『Si vis pacem para bellum』

(汝平和を欲さば、戦への準備をせよ)

2011年3月13日

日曜日

東京都/千代田区

急遽、首相官邸内に開設された内閣地震災害緊急対策本部は、未曾有の大震災の先行きについて懸念し続けていた。被害状況の把握、二次災害への対処、物資の調達・供給、避難エリアの作成、自衛隊の配備、輸送網の確保、日本国内外に対する説明とその対応……。わずか3日前に発生した『東日本大震災』の余波は至るところに押し寄せており、内閣の緊急対策本部は元となる地震の被害状況を把握するので精一杯だった。

日本国総理大臣である民自党の麻上次郎は、緊急対策本部のある総理執務室で震災からの3日間を過ごしていた。簡易ベッドとPCを持ってこさせ、被災者救出や支援態勢の構築といった実務的な仕事を黙々とこなした。また麻上は内閣官房長官の村川毅久雄やほかの閣僚達とともに、震災後の復興計画の作成にも時間を費やしていた。閣僚の中には目下の問題に対処すべきであるという人間も少なくなかったが、そんな人間に限って今後の震災の動向を確かめようとニュースに聞き入り、ろくに職務を全うしなかったため麻上は苛

立つばかりだった。

「嶋原資源エネルギー大臣。東北管内のオーランチオキトリウムプラントの状況はどうなっているか把握出来たか？」

麻上は白磁のマグカップを手に執務室のデスクに腰を下ろし、眼前に立つ嶋原清司資源エネルギー大臣に問うた。彼は直立不動のまま麻上を見据え、やや不安げな表情を浮かべながら口を開いた。

「はい、総理。現時点でのプラント稼働率は30%以下となっています」嶋原は言った。「しかし国内における総生産量には殆ど影響は出ないかと我々資源エネルギー省の人間は考えております。来月の中国への輸出は如何なさいますか？」

麻上は眉を顰めた。「日本は未曾有の損害を被った。だが、それで復興に力を注いではならない理由にはならないだろう。国家の債券にも関わる」

「では、輸出を？」

「当然だ。そこで得た金が食料や毛布を買う源となるのだからな」麻上は言った。「しかし必要分は国内貯蓄に回しておく」

彼は一呼吸おくと、隣に並んで立つもう一人の男に視線を向けた。

「前川防衛大臣。『しなの』と『むさし』の開発中だった原子炉は？」

「はい、総理」前川史一防衛大臣は言った。「申し上げますと、両艦の原子炉とも被害はありません。ですが……これは私個人の意見なのですが」前川は怪訝な表情を浮かべた。「原子炉を搭載したこの空母を国民は絶対に支持しないのではないのでしょうか……」。『福島』の一件は芳しくないと聞いておりますので……」

麻上は眉を顰めた。「どこで聞いた？」

「いえ……あくまでも噂だというのは」

「それはどうでもいい。誰が言いふらしているんだと、聞いているんだ」

前川が顔を曇らせたのを見て、麻上はそれ以上追及するのを止めた。「まあいい。君は余計な心配をせず、この『しなの型護衛艦』

のことについて考えていてくれればいい」

「そこなのですよ、総理。私が申し上げたいのは「前川は身を乗り出した。「この有事に『しなの』型建造を続行させるのは困難だと私は考えております。なにしろ海上自衛隊としては初の『原子力航空母艦』なのですから、福島原発が何らかの問題を生じているこの時期に無理やりにも建造を続行するのは、やはり予算や原子力に対する強い反感を……」

「まるで財務省の回し者みたいな言い草をするなあ、君は」麻上は言った。「私も昨日から考えていたのだが、やはり2隻の建造は見合わせるかなさそうだ。惜しいが『むさし』は建造を完全に中止しよう。だが、『しなの』だけは必ず就役させたい。これは決定事項と考えてもらっても構わん。なにしろ、シーレーン防衛はこの国が為すべき急務なのだからな」

【 時空連合艦隊 『長門』 暁の海へ 】

第1話 『黎明の遡上』

1980年代、日本では天から金が降ってくるかのような異常な好景気に沸いていた。政府は経済成長政策の他、軍事や教育、そして科学分野にも多大な予算を組み、ますます日本を高めていこうと努力していた。そしてそれが実を結び、かの『オーランチオキトリウム』が80年代後半に発見されたのだ。

オーランチオキトリウム 現実では2011年、茨城県筑波の渡辺教授が東京湾やベトナムの海等アジアの海での調査を行い、発見された藻である。採取された計150株の内、沖縄で採れた株が

極めて高い油の生産能力を持つことが分かった。沖縄の海で採れたオーランチオキトリウムは水の有機物を元に、化学燃料の重油に相当する炭化水素を作り、細胞内に溜め込む性質を持つ。そして、同じ温度条件で培養することにより、これまで有望視されていた従来の藻類の値に比べ、10倍近くの炭化水素を生成できるのだ。この油はナフサや軽油、ガソリン等も作ることができる。

このオーランチオキトリウムは、深さ1mのプールで培養すれば面積1haあたり年間1万t作ることができると試算されており、国内の耕作放棄地を利用して生産施設を2万ha分確保できれば、日本の石油輸入量に匹敵する生産量になると考えられていた。

1980年代後半に発見されたこのオーランチオキトリウムは世間をあつと驚かせ、更なる日本経済の好景気にも寄与することとなったが、バブル崩壊の90年代にはそのなりを潜めてしまった。研究予算の削減と、研究の難航がその大きな要因だった。90年代半ばには『都市伝説』程度の話題となり、そのまま誰からも忘れ去られてしまうだろうとさえ思われた。

しかし2000年、事態は好転する。研究チームはオーランチオキトリウムの実用化まで漕ぎ着け、その成果を大々的に公表したのである。

2001年、新総理大臣に就任した民自党の大泉純一郎は就任演説において、『オーランチオキトリウム』の研究・開発を国家プロジェクトとして国家戦略の一環にすると、国民に伝えた。不況に喘ぐ1990年代から抜け出せずに新世紀を迎えた日本はこれを期に『変わる』必要があると、彼は考えていた。そこで数百兆円ともいわれる国の借金を返済する為の最後の綱として、彼と民自党は大博打に打って出たのだ。就任演説において大泉総理はオーランチオキトリウムの国内生産プラントの建設と、研究の機密化を表明した。

2001年から始まった一連のプロジェクトが成果を結び始めた

のは、翌々年の2003年からだった。その年はイラク戦争の勃発、陸上自衛隊のイラク派遣が決定する年でもあった。大泉総理はここでオーランチオキトリウム油による補給支援という対外パフォーマンスに打って出た。中東 という世界でもっとも“石油”が採れる地域より安価で生産できる“藻油”を供給したのは皮肉に他ならなかった。だが、それがジョーク好きのアメリカ人に受けたのかもしれない。国際石油メジャーによって支配されてきたアメリカ合衆国で安価な藻油を求める声が沸き起こり、トヨタ等の日本車とともに対米輸出された。

2006年、大泉の後継者として総理の座に着いた民自党の阿部信一は、『国防』のあり方を見直すべき時が来たとして、オーランチオキトリウムの増産政策とともに国防政策にも力を注ぐ。憲法第9条の改正、防衛庁の『省』格上げ 資源エネルギー庁も同時期 を実行、戦後レジーム（体制）の脱却を目指す。2008年には新型護衛艦『20DDG』、2010年には『22DDA』の建造計画が発表された。20DDGは『タイコンデロガ級巡洋艦』をベースとしたイージス艦で、『あたご』型護衛艦の後継艦でもあった。一方の20DDAは『航空機搭載型護衛艦』。要は空母であり、海上自衛隊としては初の試みだった。両艦とも、建造は2000年代の大泉政権時代の中期防閣議で決定している。海上自衛隊の明らかかな『侵略軍』化が懸念されたが、イラク戦争を期に緊迫する中東情勢と石油マネーを巡るテロの脅威を前に、採択されている。

また、日本政府はアメリカ海軍の原子力潜水艦『ヘレナ』の購入を決定し、対潜において戦力不足だった海上自衛隊の穴を埋めた。

一方、航空自衛隊はF-X 『次期主力戦闘機導入計画』において本命だったF-22『ラプター』導入が頓挫 米国会によって海外輸出が禁止されたため し、途方に暮れる事態に陥っていた。航空自衛隊内の幹部の多くがあとはアメリカ側からの返答を待つだけで、F-22をF-Xとして完全に決めていたからである。

これを受けた航空自衛隊は新たな選定をし直すとともに、F-2支援戦闘機に替わる次期支援戦闘機導入計画 通称『FS-X』を並行して進め、米空軍の戦略爆撃機B-1『ランサー』のライセンス生産権取得を進めた。ミサイル等の発達によって戦略爆撃機としてのなりを潜めていたB-1は『緊急近接航空支援』という全く違った運用思想の下に使用されていた。国力や仮想敵国的に『絨毯爆撃』や『高高度爆撃』などの攻撃が似合わない航空自衛隊にとっては、もつとも見合った打撃戦力といえた。

F-Xの再選定でもつとも有力な候補として挙がったのが、F-35『ライトニング?』だった。海上自衛隊で進められている『20DDA』のことも考慮すれば妥当な判断といえたが、その実戦投入がまだまだ先であるということが航空自衛隊の幹部達の頭を悩ませることとなる。

最後に、陸上自衛隊は新型戦車である『10式戦車』の試作車両が完成しており、次なる新型戦車と『装輪戦闘車両計画』の開発進捗が重要視されていた。しかし一方で、AH-64D『アパッチ・ロングボウ』の調達中止によるAH-X 『次期ヘリコプター導入計画』の再選定においては苦渋を舐めさせられている。

そして2010年、海上自衛隊では原子炉を原動力とする新型航空機搭載型護衛艦『22DDA』計画を始動する。早足の防衛省側に何とか追い付くようにと努力した開発陣は設計案と原子炉の開発について早々と提出したのだが、それは翌年の東日本大震災 『3.11』によって呆気なく打ち砕かれてしまう。2番艦『むさし』の原子炉がモスボール化され、『しなの』のみ開発が細々と続行された。

第1話 黎明の遡上（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第2話 混沌の海原

“ 数多い医者の中で、もっとも偉大なのは時間である ”

(ユダヤ人大富豪家の教え)

2022年6月23日

木曜日

神奈川県／横須賀

『東日本大震災』から早11年。産油国としての中枢を担う日本は、更なる躍進を遂げていた。オーランチオキトリウムの生産量はバイオテクノロジーの発展と日本国内の海運事業の拡張によって増加し、いまや中東やロシア等に劣らぬ産油国となっていた。また、世界最大規模の成長を遂げる中国の安い製品の安定供給をこの安価な藻油によって実現させるなど、世界経済の牽引役も担っていた。そして、藻油からの恩恵である好景気によって早期に復興が進んだ。

護衛艦 『ながと』

この海上自衛隊が誇るべき新世代イージス護衛艦は、海上自衛隊としては初となる『イージス巡洋艦』だった。『ながと』型はタイコンデロガ級ミサイル巡洋艦をベースにした艦だが、その性能はタイコンデロガ級。そして、その改装型をも凌駕する。ベースライン7のイージスシステムを起用、CIWS高性能20mm機関砲2基とSeaRAM艦対空ミサイル2基という多重防空を図った近接防御網。そして最新型のスタンダードミサイルを中核とした弾道ミサイル迎撃能力を備え、米国との交渉の末に獲得した弾道ミサイル

迎撃ミサイル『KEI』も配備され、仮想敵国が放つ核ミサイルへの強大な関門となるのは間違いなかった。

また、ながと型は対艦・対地攻撃に対しても豊富な戦力を有していた。対地攻撃の要としてはMK45 Mod4、62口径127mm速射砲があるが、この他に16式艦対艦誘導弾と16式艦対地誘導弾を配備している。16式艦対艦誘導弾は『90式艦対艦誘導弾』の後継で、形状面においてステルス性を重視し、航続距離の増大を図っている。

一方、16式艦対地誘導弾は『トマホーク巡航ミサイル』をベールに開発された、国産艦対地長距離ミサイルである。航続距離の縮小という代償の代わりとして精密攻撃能力と運用性が重視され、開発されている。

また、対空能力はずば抜けているが対潜能力は普通という、海上自衛隊のイージス艦の弱点をカバーする試みも施されている。最新鋭のソナー・デコイ・魚雷・アスロック対潜ミサイルという4つを統合的に配備、運用するシステムを採用、魚雷はMK・46短魚雷の後継であるMK・54と同等の能力を誇るといって国産魚雷の『13式短魚雷』 G-RX5 を配備している。

「左、帽振れー！」

護衛艦『ながと』艦長、追川啓一郎一等海佐は艦橋前に立ち、インカムで告げる。甲板上に所狭しと並んだ乗員達は白い帽を手に取り、左右に振る。その間にも『ながと』は灰色の船体を海に滑らせ、優雅に進んでゆく。その姿は、艦名の元となった大日本帝国時代の戦艦『長門』に違わぬ凛々しさを秘めていた。

『ながと』型ミサイル護衛艦は現在、4隻存在する。この『ながと』が第1護衛隊群に所属し、他の『むつ』、『ふそう』、『やましろ』はそれぞれ第2、第3、第4護衛隊群に所属して防空の要に

着いている。

「両舷前進半速」

「リヨーゲン、ゼンシンハンソーク」

追川艦長の号令に呼応し、『ながと』はその速度を上げる。その『ながと』にあきづき型護衛艦4番艦の『ゆうづき』と、その後継護衛艦である『きくづき』が並走し、舳先を並べて湾口を目指す。

「……総員、戻れ！」

追川艦長のその言葉が放たれるとともに、乗員達は所定の持ち場へと駆け急いだ。

2022年6月27日

AM08:00

南鳥島沖

艦隊は暁色の波間を切り裂くように、進路を北東に取っていた。

「敵艦から小型目標分離。ハーブーン、高速で本艦に近付く」

副長長谷部翔二等海佐の報告に、追川は静かに頷いた。

「教練対空戦闘用意」

「教練ー対空戦闘用意ーッ！」

艦内にその言葉が訝すと、一同はいよいよ本来の顔を見せるようになった。

「ハーブーン接近。方位2-5-0。距離20000」

レーダー員の落ち着きを保った声がCICに響く。

護衛艦『ながと』のCICは他の護衛艦同様、艦橋基部の船体内にある。部屋は薄暗く、プラズマ・ディスプレイから漏れる光のみがCIC内を照らし出す。また、各種電子機器を冷やすためにとC

ICは年中空調設備が行き届いていて、夏冬構わず肌寒さを感じる。故に、CICに詰める隊員達は冷房病予防にとジャンパー着用が欠かせなかった。

「了解。ESSM、攻撃始め」

CICの長、砲雷長の神崎麻里奈三等海佐は頬に汗粒を伝わせながら言った。

「インターセプト5秒前……スタンバイ……マーク・インターセプト」

レーダー画面から2つの目標が消えた。

「2発撃墜。なおも接近中」

レーダー員の息遣いが荒くなっている。

「落ち着いて、許容範囲よ」神崎は言った。「主砲、RAM発射用意。撃ち方始め」

護衛艦の要たるCICから放たれた号令は電子回路を通じて護衛艦の体内を駆け巡り、主砲である127mm速射砲へと届けられる。そして主砲は咆哮し、電気信号という名の砲弾を放った。また、RAM対空ミサイルも咆哮する。

「第3目標撃墜。第4目標がなおも接近中」

「CISWS、AAWオート。撃ち方始め」

その言葉とほぼ同時に艦橋部に備えられた2基のCISWS、高性能20mm機関砲『フランクス』が作動する。レーダーや火器管制システム、バルカン砲を一体化したCISWSがハーブーンを捉え、狂ったように銃身を回転させた。

「第4目標、撃墜！」

レーダー員の緊迫した声をインカム越しに聞き、追川はほっと胸を撫で下ろした。

「……各科、受け持ちの被害状況知らせ！」

「SPYレーダー。SPQレーダー異状なし。接続良好」

「左舷、敵ミサイルの破片直撃。浸水発生！」

「各科、負傷者あり。現在集計中」

「各科、浸水区間の対処及び負傷者の応急処置を急げ！」

追川はインカムに叫び、目頭を押さえながら椅子に座り込んだ。

「うむ……かなりの接近を許してしまった」

「神崎三佐の適確な指示がなければ、更なる接近と被害を招いていたことでしょう。しかし、まだまだ訓練の余地はありそうですね」

長谷部は言った。

「そうだな……」

追川は静かに呟き、艦橋の窓から紅く染まった海原を見据えた。

【 時空連合艦隊 『長門』 暁の海へ 】

第2話 『混沌の海原』

「我らが女神様のご到着だ」

護衛艦『ながと』の士官食堂。食事を載せたトレイを手に席を捜す神崎砲雷長に声を掛けたのは、副長であり上官であり同期でもある長谷部翔二等海佐だった。『ながと』という比類なきイージス巡洋艦の火力・運用を双肩に担っているこの2人は、防衛大学校時代からの唯一無二の親友だった。

「それとも天使の方が良いかな？」

「お好きなようにどうぞ」

神崎は気恥ずかしそうに席に着き、長谷部と向かい合った。

「訓練では世話になったよ。やっぱり君は優秀だ」

長谷部が箸を手にそう言うと、神崎は首を振った。

「そんな事ないわよ。さっきだって、もう少して直撃しそうだったし」

彼女は完璧を目指す。そのことを知っていた長谷部は彼女の肩を優しく叩いて笑みを浮かべた。「やっぱり君は優秀だよ。間違いない。俺が保証する」

長谷部の優しい口調に、神崎は頬を紅く染めた。

「副長！」

2人が笑みを浮かべ、話を交わすその最中、和田二等海曹が現れた。その顔は芳しくない。この護衛艦『ながと』に関連した、何らかの問題でも起こったことを長谷部は感付いた。

「何だ。何かあったのか？」

「いえ……私は艦長に副長をお呼びするようにと言われただけでして」

「了解した」長谷部は頷き、トレイを手にして立ち上がった。「では砲雷長、続きはまた今度」

神崎は静かに頷き、笑みを顔に湛えた。「了解です。副長殿」

追川艦長は航海長の西野辰也を伴い、艦橋で何かを話し合っていた。その顔色は思わしくない。長谷部は艦橋出入口で敬礼し、入室した。

「艦長、お呼びでしょうか？」

「ああ。実は天候が良くないんだ。時化が近付いている」

追川は表情を曇らせて言った。

「気象庁からの報告によりますと、ミッドウェー諸島沖で発生したハリケーン『ジョン』が西経180度を越え、西下しているとのこと。気象庁はこれを『台風9号』と命名しました」

西野は気象庁から届けられた情報が綴られている書類を読み上げた。

「台風9号の詳細は？」

「中心気圧920ヘクトパスカル。最大瞬間風速は60メートル」
長谷部は顎を擦り、洪面を浮かべた。「猛烈な強さだな……」

その間にも、護衛艦『ながと』と護衛隊群は荒れ模様の海原を突っ切っていった。『ながと』の心臓部たるゼネラル・エレクトリック社製LM2500ガスタービンエンジンは疲れを知らない。機関整備員たちは出航前から整備状態に不安を抱いていたが、ガスタービンエンジンは『ながと』の軍艦としての機能を全く損なわせない働きをしていた。

「台風9号はなおも勢力を衰えず、本艦に接近中…… ツツ！？」

刹那、落雷の閃光と爆音が轟き、航海長の西野はたじろいた。まるで地の底から沸いたような落雷の爆音はなおも彼の耳を痺れさせていた。激しい暴風雨が『ながと』の船体を叩き付けていた。

「艦橋、CIC。水上レーダー、護衛艦隊を捉えられません。艦隊をロスト！」

艦内電話の受話器から響いたのは、電測長の新條一等海曹だった。「何だと。そんな馬鹿なことがあるか」長谷部は唸った。「通信は？」

「護衛艦『あかぎ』からの通信途絶。旗艦『ひゅうが』と『ゆうづき』、『きくづき』、『ゆきかぜ』も同様です。全艦から応答ありません」

「くそ……衛星はどうだ？」
「スーパーバード、応答ありません。接続が遮断されているようです」

長谷部は沈黙した。レーダー、通信、衛星通信。これら外部への監視・接触を司る機能を失ったということは、この『ながと』が盲目同然の状態に陥ってしまったことを意味する。しかも太平洋上という、見たことも聞いたこともないような地域でだ。こんなことからもつと有事に際した訓練をすべきだったと、長谷部は後悔混じりに考えた。

「待ってください！」新條は言った。「……旗艦『ひゅうが』、コンタクト！」

嵐が白みはじめた頃のことだった。この護衛隊群を指揮するヘリコプター搭載型護衛艦『ひゅうが』がスクリーン画面上の海図にアイコンとして姿を現したのだ。【DDH181-HYUGA】という桃色の文字が艦橋の電子海図に現れたのをみて、長谷部は胸を撫で下ろした。

「まずは一安心だな。他の艦は見つかったか？」

『いえ、まだ……あ、あかぎ』コンタクト！』

護衛艦『ながと』は完全に台風9号の暴風圏内から脱しようとしていた。灰色から群青色に変わった海原に艦首を突き立て、切り裂きながら海面を駆り進む。艦橋の電子海図には、護衛隊群の中核である航空機搭載型護衛艦『あかぎ』の一際大きなアイコンが点滅していた。

『更に『ゆうづき』、『きくづき』、『ゆきかぜ』もレーダーで確認しました。輸送艦『おおすみ』、潜水艦『ずいりゅう』、『かいりゅう』との連絡はなおも途絶』

「それは参ったな……」追川は洪面を浮かべた。

「如何なさいますか、艦長？」

「そうだな……それは望月司令と話さなくてはどうにもならん」

追川は言った。「至急、『ひゅうが』との通信を繋いで」

『朗報です。『おおすみ』、『ずいりゅう』、『かいりゅう』も発見されたとのことです』

CICから届けられたその言葉を聞き、追川はほっと胸を撫で下ろした。艦隊に所属する全艦が揃った。これでハワイへと歩を進められる。

「艦長、『ひゅうが』との通信回線、開きました」

長谷部は告げ、追川に通信機を手渡した。

『こちらは護衛艦『ひゅうが』。望月だ』

そう告げたのは、同護衛隊群司令官の望月淳一海将補だった。雑音混じりの通信回線を経て届けられる望月の声は、威厳に満ち溢れていた。

「望月司令。『ながと』艦長の追川です」

『追川艦長。無事だったか。突然消えたもんで、一時はどうなるかと思つたよ』

追川は眉を顰め、通信機を耳に押し当てた。「どういふことですか？」

『こちらの水上レーダーから君の艦の反応が消えたのだ。それから少しして、『あかぎ』『ゆうづき』『きくづき』『ゆきかぜ』もだ。通信も途絶え、衛星でもコンタクト出来なかった』

「それはこちらも同様です、司令。当艦も貴艦を見失いました」
望月は沈黙した。彼も追川同様、一抹の疑問と不安を覚えたのだろう。追川にとつては永遠とも思える間があき、通信は再開されなかった。

『追川艦長。伝えておきたいことがある。君の艦をロストする前に横須賀の護衛艦隊司令部から連絡があつたんだ。内容は簡潔、『全艦、母港へ帰投せよ』だ。分かるな。今回の演習は中止だ』

追川は顔を顰めた。「日本に何かあつたんですか？」

『……いや、具体的な内容までは』望月は言った。『しかし、有事の事態が起きたことは確かだ。台風9号の件もある。既に被害を被つた艦も居るだろう。帰投するのが賢明だと私は思う』

「それは私も同感です、司令。命令に従います」

それから1時間と経たずして、リムパック演習へと向かう筈だった護衛隊群は母港横須賀に向けて、反転した。艦隊は台風9号の外縁に沿つて大回りをしつつ、日本への帰路に着いた。『ながと』艦長の追川や他の艦の艦長はその理由について、深くは説明しなかったが、下士官の多くは予定よりも早く日本へと帰国できることに内心喜びを隠せないでいた。一方で士官や佐官の多くは本土で有事の事態が起こっていることについて、不安を隠せずにいた。

こうして、複数の想いを乗せた護衛艦は帰国の途についたが、そ

の道は果てしなく遠いものだった。
。

第2話 混沌の海原（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1124z/>

時空連合艦隊『長門』 暁の海へ

2011年12月4日08時52分発行